

2022年4月1日発行（春号）

No.69

会報 いず高原げん



 **伊豆高原親和会**

静岡県伊東市八幡野1208-95 TEL(0557) 53-1122 FAX(0557) 54-4222

伊豆高原移り変わり

昭和の初めまで

大室山は四千年前の噴火によって出現し、そこから流れ出た溶岩が新たな台地を形作りました。その溶岩台地は、昭和の初めまで先原三里と呼ばれていて、岩だらけで農耕に適さず荒地のままでした。伊豆東海岸の古道「東浦路」を歩く旅人には、狼が出ると恐れられていたのです。地元の人たちはこの台地の雑木林を、ナラやシイなどの薪炭林に切りかえ炭や薪として、溶岩のボク石などと共に八幡野港から船で東京方面に出荷していました。

光の村の建設

昭和八年、岡崎久次郎氏によって集団農場「光の村」が建設されました。場所はグランパル公園から下田に向かって東大室分譲地を過ぎたあたりから右手に広がる地帯で、「光の村」建設があまり進まないうちに、戦争が激しくなり中断を余儀無くされてしまいました。戦後に満州からの引揚者が大室開拓農事実行組合を作りました。しかし、水が無く土も悪くて厳しい生活を余儀なくされ辛酸を舐めてしまいました。

二十五次 丹羽 忠昭

その後、光南農場として牧畜などが行われていましたが、国立公園の規制が緩い普通地域であるため、現在では跡地にホテルやマンションが建ちならんでいます。



地域データ提供：国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所
地図調整：伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局

大室高原分譲地の発足

昭和三十二年（株）東拓が、十萬坪を池区から坪単価百三十五円で買い取り、大室高原分譲地として販売、大室高原理想郷と名付けました。

シャボテン公園の誕生

昭和三十二年、近藤典生シャボテン博士が岩室山にシャボテン公園を誕生させ、国道に建てたモニユメントと共に一躍脚光を浴びました。

中小不動産会社の開発

昭和三十年代初頭から原野だった手づかすの台地を、中小の不動産会社が競って開発を進めました。内容は乱開発とも言うべきで、道路や水道等のインフラが未整備のまま安売りされたのです。

鉄道路線の認可

昭和三十二年鉄道認可申請と併せて、東急電鉄が伊豆開発班を発足させ、鉄道用地及び周辺の用地買収を開始しました。路線認可をめぐり西武鉄道（堤康次郎）と東急電鉄（五島慶太）との間で、軽井沢・箱根に続く縄張り争いが繰り広げられました。昭和三十四年二月東急電鉄に路線認可が下り、四月に伊東下田電気鉄道を創立、昭和三十六年二月伊豆急行株式会社に商号変更されました。昭和三十五年一月に起工式、翌年十二月に竣工・開通式が行われました。



販売開始当時の伊豆高原駅前（昭和38年頃）

まさに、五島慶太氏の存命中に開通させようとしての突貫工事でした。その前年には、伊豆急行が開発部を設置し、三百六十三万㎡にも及ぶ大規模な分譲地の造成工事に着手しています。

伊豆高原の名前の由来

昭和三十六年九月駅名が発表され、地名の八幡野では響きが悪いので「伊豆高原駅」と名付けられました。海拔が低いのに高原と名付けたのは、駅周辺からの景観が天城連山から連なる山々を背景に、伊豆大島を初めとした七島が並ぶこの台地が高原情緒に溢れていたからです。

その後伊豆高原の名前が定着して、「日本一低い高原」と言われるようになったのです。

伊豆急行線の新駅と輸送人員

開通当初は十三駅でしたが、昭和三十九年に伊豆北川駅、昭和四十四年に今井浜海岸駅、そして昭和四十七年に城ヶ崎海岸駅が新設されて、十六駅となりました。構想はありましたが実現しなかった駅は、赤沢駅、川奈ホテル駅、三の原駅の三駅です。一方、輸送人員は昭和三十七年の三百九十二万人から右肩上がりに増加、平成三年には一千万人を超えました。

伊豆高原分譲地の発展

昭和三十七年伊豆急行に不動産部・東京事務所が新設され、分譲地販売の拡大が図られました。昭和三十八年、伊豆高原分譲地の第一次分譲が開始され、翌年に給水・給湯工事が完成しました。水道は池地区の地下からくみ上げ、温泉は鉄道線路沿いに送湯管を敷設し、熱川湯ノ沢から引湯したのです。

その後、別荘ブームが起り、販売区画ごとに見学会を実施し、人気の高い区画は抽選となりました。次にペンションブームとなって、あちこちでペンションが建てられ、東大室地区ではペンション専用区画も販売されました。それから多くの保養所が立ち並び、観光客も増加して飲食店・土産物屋・美術館・記念館など多くの店が出店されました。

隣接地の開発計画

また隣接する地域では、相模鉄道が七二ホールゴルフ場建設を計画し、池地区から二車線道路を遠笠山中腹まで完成させましたが、バブル崩壊によりゴルフ場建設は中止となりました。伊東市は途中まで建設されていたこの道路を利用して、終点に天城霊園を完成させたのです。またその隣接地では、東京渋谷のダイ

ア観光（株）が一ハホールのゴルフ場建設計画を立てましたが同様にバブル崩壊により中止となりました。その後、転売されメガソーラー建設計画に変わったのです。

伊豆高原駅前開発計画

鉄道利用人員の増加に伴い伊豆高原駅の改装及びやまもプラザの建設がすすめられました。バブルの崩壊により、その後の駅周辺開発計画が頓挫してしまいました。

高室山開発計画

大室山から小室山の間にある高室山は、造成工事のため頂上付近が二十数㎡削り取られ、標高三百三十四mから三百一十一mとなりました。万三郎岳を頂点に北東方向に連なる山並みが小室山に向けて徐々に高度を下げていたのですが、高室山は造成工事によって小室山より低くなってしまいました。

高室山の周りを分譲する計画も、中止となってしまいました。（万三郎岳千四百六m、万二郎岳千二百九十九m、遠笠山千百九十七m、矢筈山八百十m、大室山五百八十m、岩室山四百三十九m、小室山三百二十二m）

高室山は別名ユーカリ山とも呼ばれ、ユーカリは鉄道の枕木とし

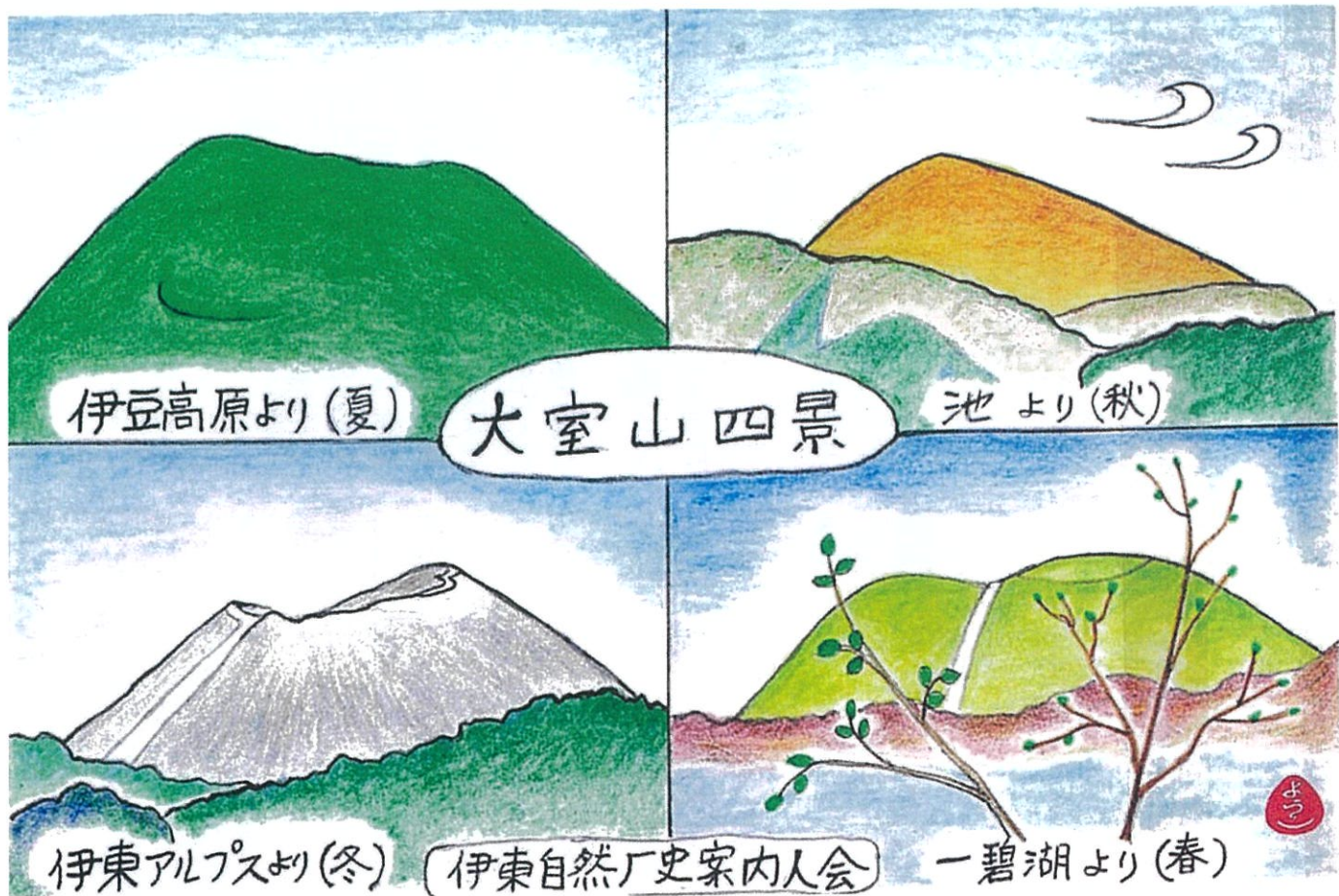
て植えられました。が、柔らかすぎて使用できなかったのが今も残っています。

伊豆高原を取り巻く山と池



池地区には「七室七池」という言葉が伝わっています。伊豆七島や河津七滝などと同様に、七は多数を表すので特定は

できませんが、大室、小室、岩室、松室（伊雄山）、十足高室、富戸高室、穴室を指しています。別説として小谷三志の豆州修行記には、高室、岩室、大戸室（矢筈山）、小戸室（孔の山）、松室、ふと高室、小室とあります。七池については、豆州修行記には、池村の池、吉田の池（一碧湖）、吉田の沼池、吉田の菖蒲池（川奈ゴルフ場の中）、吉田の鴨が池（伊東商業高校近く）、鴨が小池（鹿路庭峠下）が記されています。なお、伊東の最高峰は矢筈山（八百十m）ですが、最高地点は遠笠山の中腹で、千mを超えています。



バブル崩壊後の不動産事業の後退と
土地価格の下落

バブル崩壊と共に別荘需要は低迷し、ペンション・保養所なども閉鎖に追い込まれるケースが増えて、来遊客も激減してしまいました。

分譲する側も、土地開発規制の強化や土地税制が強められたことなどもあって、新規の分譲はほとんどなくなってしまいました。

これからの伊豆高原

長期化するコロナ禍により、働き方や生活環境が変わり始めています。土地価格の下落により新たな移住者・購入者が増加、さらにはコロナ禍から逃避して来る永住者も増加し始めました。また在宅でのテレワーク普及により、都心から郊外へ、地方へと移り住むケースが見られるようになりました。

一方都会でのマンション暮らしに飽き、退職後は自然豊かな土地を求める人達も増え始めています。

伊豆高原のほぼ中央にある城ヶ崎高校が伊東高校と統合することになり、その跡地がどのように活用されるのかが今後の課題です。地域の発展のために活用されることが望まれます。

ここ伊豆高原は、国立公園の中にあって四季の移ろいなど人間本来の生活を営むことができます。さらに、

気候温暖な理想的な生活環境が備わっています。ただ一つの問題は、生活の利便性に欠けるということですね。それも近い将来には、自動運転車両や無人バスの導入なども計画されており、病院やショッピングなどに行くときの交通の不便さが解消されるのが期待されています。車のいらない社会が近づいているのです。

ー 完 ー

参考文献

「伊豆とともに生きる」

「伊豆急行30年史・50年史」

「伊東風土記」加藤清志



親和会は、一九六五年（昭和四〇年）四月一日に発足し、三年後には六〇周年を迎える歴史ある自治会です。「会報いすこうげん」では、六〇周年に向けて、これまでの親和会の歩みをいろいろなテーマのもとに、六回連載で振り返っていきます。

「親和会の初めから」を知る第一地区会員の宮内さんに助言をいただきながら進めていく予定です。宮内さんは、一九六〇年夏に東急から伊豆の開発の使命を帯びて伊豆急に転籍してこれ、以来、伊豆高原を中心として下田までの伊豆急沿線開発を進めてこられました。爪木崎の野水仙を旅雑誌で紹介し、今のような観光スポットにしたのも宮内さんです。

二〇〇九年四月発行の会報四三号に「伊豆高原親和会の設立」という囲み記事があります。再掲しますと「昭和四〇年に環境の整備・管理と親睦を目的とした管理組合的な性格を持った任意団体「伊豆高原親和会」を土地・建物所有者と伊豆急行（現伊豆急不動産）でつくり、最初の一〇年間は法人が運営にあたり、次の二〇年間は別荘会員が理事長を務めました。徐々に定住会員も理事に加わり、親和会報の発行、自主防災組織の結成等、伊豆高原地域の連携も進めて参りました。そして、平成

九年からは、定住会員が理事長を務め、定住理事が主体となって運営し現在に至っています。」（原文のまま）と紹介されているように、発足当初はほとんど定住者がいない中で自治会の発足だったようです。当初の親和会費は土地所有会員と土地・建物所有会員に分かれ、それぞれ個人では四千元と一万元、法人では一万元と五万元となっていました。年会費の金額であることは今でも変わりませんが、この五年間で二倍前後の引き上げにとどまっているのは、自治会運営にあたっての会員の皆様のご協力の賜物です。

親和会が三〇周年を迎えたときは、別荘会員の方が理事長を務めた最後の年度に当たりますが、伊豆高原暮らしを始めた方や運営に当たった方が会報に声を寄せています。「親和会の歩み 第一回」にあたって、まずは、会報一七号に掲載された伊豆高原への想いを綴った会員のエッセイからご紹介します。エッセイを寄せてくださったのは、第四地区に移住された片山さんです。

「伊豆以外にも日本には美し

第1回

親和会のあゆみ *Since 1965*

く景勝の地がいっぱいあるんだよ』と主人に笑われながら数十年間、旅行といえば伊豆。主人も私も仕事に追われる身で、まとまった休みの取れるのは夏休みの一週間だけで、その貴重な日を伊豆へまっしぐらという具合でした」と、昔からの伊豆とのかかわりに触れています。ご自身の病気とご主人のリタイアの時期が重なったことが伊豆に永住するきっかけで、城ヶ崎地区に引っ越してこれたとのことでした。

伊豆の生活の魅力を「自然の魅力は想像を超え、早朝の可愛らしい小鳥の囀りに始まって、たそがれ時夕日が海を紅にそめる美しさ、夜は満天の星にうつとりしたり、月明かりで樹木が美しいシルエツトをえがく、ため息をつくほどの素晴らしさ！」と日々の自然の変化と美しさに、また「水仙と梅の香りが運んでくれる春、深い緑と山百合の夏、黄葉の秋、そしてベージュ色の風景に心とませてくれる冬、四季それぞれの変化も都会育ちの私には実に神秘的な魅力にうつります」と伊豆の季節の様相の豊かさに見出しています。片山さんは、ここに越してきてよかったとして、この地の美しさを知っ

てもらったためにも、ご自分のバレエの生徒達を自宅に誘っています。「美しい自然と、優れた芸術は情操を高めるだけでなく、魂を浄化させる力を持っている」という言葉を信じていますので、多くの方々に美しい自然を身近なものにしてほしいと心より願ひ、私なりに努力をしている昨今です」

片山さんの想いは、今の私たちにも共通するものと言えます。同じような想いで伊豆高原に移住された方も多いと思います。いつまでも美しく神秘的な伊豆高原の自然を守っていきたくと改めて実感しています。



アトリエ・ロッキーさん撮影

親和会部会報告

総務部会から

★役員会報告（毎月第三火曜日開催）

（二〇二二年七月～十二月の主なもの）

＊審議事項

○道路補修の実施

○側溝の補修の実施

○ヤスデの駆除と蔓延防止策

○防犯カメラの設置について

○カーブミラーと街路灯の新設

○浸透池等の樹木伐採工事

○会費未納者対策

○伊東市と連携しての空き家対策

○ゴミステーションの美化

○はみ出し樹木の管理

○域内交通安全対策

○役員の選任について

＊報告事項

○各地区連絡会報告（毎月）

○各部会活動報告（毎月）

○親和会会費納入状況及び月次収支報告（毎月）

○事務局活動月次報告

○伊豆高原自治会連合会及び地域創生協議会活動報告

○夢プロ報告

○メガソーラー問題について

会費納入のお願い

親和会会員各位には、毎年会費納入にご協力頂き厚く御礼申し上げます。

ご存知の通り、会員自らが親和会のテリトリーを管理運営しており、すべて会員皆様の会費により運営されています。会費は、当地区内の道路及び側溝補修、街路灯維持管理、浸透池整備、域内清掃、ごみ処分、親和会運営事務等、より良い環境を整備するために使われております。

ほとんどの会員の方は期日迄に納入頂いておりますが、一部の会員におかれましては、何らかの事情により期日迄に入金頂いておりません。会員の公平性を期するためにも、また会員の義務としても、会費納入へのご協力をお願い致します。



道路部会から



二〇二二年度の道路補修は、昨年と同規模の工事を行うために、親和会の総予算の約三割を充てて予算を組んでいきます。それでも一般的な道路補修のペースには到底追いつきませんので、レミファルトによる簡易補修を適宜行いながら、道路の傷みの激しい道路については、地区間の公平性を考慮した上で、できるだけ会員の要望に答えられるように、舗装工事を策定していきます。

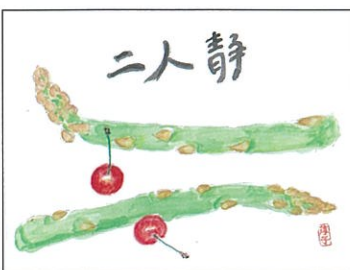
工事計画の策定や決定については昨年と同様のスケジュールで進めます。七月の地区連絡会で各地区の要望をまとめ、最終的には九月の役員会で道路補修案を審議し、十月以降工事を行っていく予定です。

また、伊東市への道路移管については、現在七か所の道路において、移管を前提に打ち合わせしており、二〇二二年度中に、少なくとも一か所

は結論を得たいと考えています。

近年痛みの目立つ道路横断側溝の補修については、個別に対処してはいますが、業者に発注しなければならない工事も増加しているため、これまで通り道路予算の一定額を割いて順次補修していきます。

なお、伊東市からは、毎年「伊東市魅力あるまちづくり事業補助金」から道路補修に対する費用補助があります。が、昨年度はこれに加えて三〇万円の補助がありました。



イベント部会 絵手紙の会より

環境部会から

【浸透池・緑地の樹木伐採・整備】

昨年度は、浸透池の整備要望に対し優先順位付け（安全対策・環境対策・美観）を行い、経費削減を考慮し、一括発注を行いました。安全対策については全要望に対応できましたが、環境対策については全ての要望に応えることが出来ませんでした。今年度も同じ進め方を予定していますが、環境対策や大型樹木の伐採については新たな取り組みを考えます。

【浸透池の環境対策】

最近「浸透池の除草が行われなくなった」「除草の頻度が減った」「浸透池の雑草が伸び、灌木が大きくなった」等の声を聞きます。また、ヤスデ異常発生の原因の一つとしては、手入れの悪い浸透池が繁殖地になっているとも推測されています。しかし、親和会が業務委託契約している作業要員の方々は、道路の除草、落ち葉清掃、道路の部分補修等の個別対応作業の増加により、浸透池の除草に十分な時間を割けなくなっています。そこで、今年度は、宅地に近い小規模浸透池を中心に外部委託で除草を実施したいと考えています。

【ヤスデの異常発生対策】

第三地区で異常発生しているヤスデ（ヤンバルトサカヤスデ）は、最近では、第二地区付近でも発生が確認されています。このヤスデの駆除については、餌となる落ち葉の除去は重要な対策の一つですが、その他に確定した駆除方法がありません。環境美化部会では、今年度の前半に、以下の三つの駆除方法について調査と検証を行ないます。①浸透池において餌型薬剤による個体数の削減、除草等の実施②浸透池等への移動防止柵設置③家屋への侵入防止のためにアルミテープ等を使ったヤスデ返しの設定、を計画しています。

【浸透池・緑地の大型樹木伐採計画】

宅地に近い中小の浸透池の周囲では道路や隣地の境界ギリギリにヒノキが植えられ、多くは大木化しています。これら大木化したヒノキは枝の成長も早い（年間五〇cm〜一m程度）ため、根本的な対策として伐採を行う必要があります。昨年度の役員会での決定に基づき、浸透池・緑地の大型樹木伐採・整備の実施計画（概算費用・スケジュール）を作成します。

【ゴミステーションの美化】



2021年12月撮影 第2地区ごみステーション写真 #21

ゴミステーション（G.S.）を気持ち良く綺麗に使うため、古く不要な汚れた掲示物、汚れてしまったケージの交換などを行います。昨年十二月に全てのゴミステーションを調査し、これを元に今年度予算にも反映しました。目標とするゴミステーションの姿は、写真（G.S.のG.S.）のようになります。

はみ出し樹木の剪定・伐採のお願い

親和会が管理する伊豆高原分譲地は、約二四〇万㎡の土地に二千四百戸余りの建物が建ち、緑豊かな管理の行き届いた別荘地として知られています。しかし開発からほぼ六十年を経て、長年放置されたままの家屋や空き地が目立つようになりました。

これらの区画では、伸び放題になった樹木の幹や枝が道路に張り出して車の往来や人の歩行に支障を生じたり、敷地の境界を越えて隣の住戸に迷惑を掛けたりしています。はみ出し樹木は、単に分譲地の美観や景観を損ねるだけでなく、道路の見通しを妨げるなどして交通事故につながった場合は賠償問題になることも考えられます。

親和会としては、事務所に連絡があれば樹木の所有者に剪定・伐採をお願いしています。特に昨年は、土地のみを所有している会員全員（三六八名）に適正な樹木管理をお願いしたところ、多くの方から反応があり剪定・伐採をしていただきました。写真を見ると手前の剪定済みのお宅に比べ、道路に枝が大きくはみ出した奥の区画の異常さが際立ちます。会員の皆様におかれましても、日



常的な敷地の手入れの中で、道路や隣のお宅にははみ出した樹木の剪定や伐採を是非お願いします。

▲はみ出し樹木
実際の写真

地域防災訓練を実施して

一昨年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、家庭内訓練に特化した地域防災訓練でしたが、今回は各地区で集合訓練も実施されました。

親和会の自主防災会は、一九九〇年四月に各地区単位の組織として発足しましたが、市との連携を強化するために、伊東市の行政区単位に作られている連合自主防災会に倣って、一九九四年四月に伊豆高原連合自主防災会を設立しました。伊東市からは将来的に近隣の分譲地も伊豆高原連合自主防災会に入ってもらいたいと要請されていましたが、最終的には親和会だけの組織として、二〇〇九年に親和会と一体化し、現在の組織になりました。伊東市は伊豆高原連合自主防災会に対して、行政区以外の自治会などを力バーすることを期待していたようです。

昨年十二月五日、伊東市の地域防災訓練が「防災力 高めて広がる 地域の輪」というスローガンのもと、相模トラフを震源域とする第四次地震被害想定「レベル2の地震」の発生を想定して行われました。親和会では、当日の訓練として、各家庭でのシェイクアウト訓練、OK旗の掲出（掲出率は五〇％）、各地区防災倉庫前での集合訓練を実施しました。防災倉庫の備品の確認や、第二・第四地区では訓練用の小型消火器による消火訓練を行い（写真）、全地区で約五七〇名の会員が参加しました。



OK旗は、地震などの災害発生時に、救助不要の人を識別し、救助隊が速やかに救助を必要としている人のところへ行けるように、家の前のよく見えるところに掲示して「無事です」と知らせる旗です。今回は第二地区で掲出率が七五％と非常に高く、各班長さんが各家庭を回って呼びかけた成果といえます。

OK

各地区連絡会開催（予定）のお知らせ

今年の夏の地区連絡会は、新型コロナウイルスの感染状況にもよりますが、現時点では、例年どおり夏休みに入った最初の土曜日に開催する予定です。開催場所については、第一地区および第二地区は、親和会会議室または八幡野コミュニティセンター、第三地区および第四地区は憩いの家を予定します。なお新型コロナウイルス感染防止対策が静岡県で実施される状況になれば、広い会議室を確保する必要があり、また伊東市の憩いの家は使用できなくなることも考えられるので、四地区とも八幡野コミュニティセンターを利用することになります。八幡野コミュニティセンターの空き状況を見ながら開催することになるので、開催日程が変わり七月の夏休みに入った最初の土曜日とその次の土曜日を予定します。詳細は、七月初めの親和会電子掲示板又は親和会ニュース七月号でご確認ください。

★開催日や開催場所が変更になっても、各地区の開始時刻は次の通りです。

第一地区 午前十時 第二地区 午後一時三〇分
第三地区 午前十時 第四地区 午後一時

年末餅つき大会

開催について

年末に、会員の皆様が楽しく交流できる場として近年定着した餅つき大会ですが、残念ながら昨年、一昨年と、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむなく中止いたしました。

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大状況にもよりますが、開催が見込める状況になった場合には、会報いすこうげん七〇号（二〇二二年十月一日発行予定）にてご案内いたします。



伊豆高原
親和会
電子掲示板



<https://izukogen-shinwakai.org/>

（広報部会）編集委員

市原 輝夫 徳本 政幸
井上 順子 牧島 珪
小川 たつこ 山田 華恵
鈴木 恵子 吉田 勇
高橋 亘 （五十音順）
事務局 赤堀 井端